

『少女の誘惑 1』

弱弱しい声やその言葉を信じた訳じゃない。
ただ、こんな世界の有様の中で、犯罪者となった人物の思考が気になった。
どんな顔をしているのか。
何を考えているのか。
知りたいと思った。
純粋な興味、だった——。

ラトヴィッジ・オールウィンは、当番の日に鍵を持ち出して、犯罪者の少女が監禁されている部屋へと行った。

夜、会いに行く彼女には既に伝えてある。

「まずは少し話さないか？」

食事用の小窓から、そう問いかける。

「鍵を開けるかどうかは、それから決めたい。もっとお互いの事を知ってから」

「誰かに聞こえてしまうわ」

「皆寝ている。起こさないくらいの、声で。だって、俺はアンタの顔も見れないし、リスクも犯してるんだ……それくらい、いいだろ？」

「わかった」

小さな声が響いてきた。

「俺はラトヴィッジ・オールウィン。年は21。趣味は美人を口説く事……なんて冗談だ。さあ、アンタも」

軽い口調で言い、少女に自己紹介を促す。

「……どうした？ 言えないのか？」

「ごめんなさい……ラトヴィッジ、会いたい。ドア、開けて」

細い手が、伸びてきた。

ラトヴィッジは一先ずその手を両手で握った。

「単刀直入に聞いていい？ 何でここに居る事になった？ アンタは何を考えてる？」

「あなたが、本当に……私が待っていた人かどうか、わからないと言えない」

少女の細い手は、小刻みに震えていた。

この部屋では魔法が使えない。そして手の細さでわかる。彼女は体術などを会得していない、ひ弱な少女だと。

「わかった。ドアは開ける。ただ……逃げるんだったら、俺のせいにならないようにして欲しい、なんてな」

「鎖でつながれているから、逃げれないわ」

「そうか。あと……これ大事だ。俺はアンタの顔が見たい」

言って、ラトヴィッジは開錠してドアをあけた。

彼女は部屋の奥へと下がり、ラトヴィッジは彼女の顔を見るために、ランプを持って近づいた。

「ラトヴィッジ・オールウィン……私が誰だか、わかる？」

長い銀色の髪、悲しい目をした華奢な少女だった。

彼女の言っていたことは嘘ではなく、足を鎖でつながれている。

見たことがある。知っている娘だ——名前は。

「サーナ・シフリアンよ」

サーナ・シフリアン。水魔法の優れた資質を持つ、将来有望な子供だった。

初代神殿長の子孫であり、家族と共に神殿で暮らしていた。洪水が発生するまでは。

彼女の親族は全て、洪水の時に亡くなってしまった。

「何故、ここに？ 避難したとばかり思っていた。それに、なんでこんな……誘惑みたいなことを」

「私、もうすぐ16になるの。少しは成長したでしょ？ だから、こういうことも出来るんじゃないかって」

言って、サーナは俯いた。

ラトヴィッジは、元々この地域で神殿警備等の任務に当たっていた騎士だ。

とくに親交はなかったが、彼女のことは知ってはいた。

「そうまでして、人を呼びたかった理由は？ なんでここに？」

「神殿の力を、私は正しく使おうとしただけ。私たちは死ぬべきなの、よ……っ」

途端、サーナはラトヴィッジに体当たりするように、抱き着いてきた。

その抱擁はラトヴィッジを誘うようなものではなく、縋りつくかのようだった。

「怖かった……こわい……こわいよ」

華奢ではあったけれど、最後に見た時とは違い、彼女の身体は女性のものへと成長していた。

「ラトヴィッジ、あなたは誰の騎士なの？ 誰に忠誠を誓ったの？ メイユール伯爵？ コーンウオリス公国？」

誰の騎士。そんなことは、考えたこともなかった。

「違うでしょう、あなたはここの騎士。ここを護ってくれていた……私の騎士、だよ」

サーナの言葉に、ラトヴィッジの心が掻き乱れる。

自分は、何に、どこに忠誠を誓い、騎士になったのだろうか。

ラトヴィッジは騎士の家系の生まれで、騎士となるべく育てられてきた。それが自分の生きる道だと思っている。

……それは建前だ。

実は、ラトヴィッジは孤児だった。

亡き両親に引き取られ、養父の跡を継いで騎士になった。

だけれど、自分の人生それでいいのかと考える時があった。

それは自分で決めた道でもなく、剣を捧げたい相手がいたわけでもなかった。

ただ、養父母の期待に応えるため、生きてきた。

「洪水前からここを護ってくれていたあなたなら、信じられる。

私を、ここから出して」

声を振るわせて泣きながら、絞り出すようにサーナは言う。

「……最後の時まで、傍にいて」

彼女の声は、ラトヴィッジの心の奥まで響き、揺さぶった。

涙に嘘はないのだと、それだけは分かる。

13歳の時から、暗くて狭い部屋の中で、ずっと独りで。

とてつもなく重いなにかを背負い、過ごしてきたのだろう。

「来月、ここの、大掃除が……行われるはず。鎖、外されるから、お願い、その時、迎えに来て——」

明け方まで、ラトヴィッジはサーナの側にいてあげた。

泣きつかれて眠った彼女を、ベッドに寝かせて。

傍らで考えていた。

こちらのリアクションは以下の方に発行されています。

ラトヴィッジ・オールウィン